

IV. エチオピア現地研修の様子と受講者の学び

※ 現地研修の「研修報告書」を一部編集して掲載した。
なお、訪問先の番号は、4 ページの現地行程表の番号と一致させています。

[8/8(月)]

① JICA エチオピア事務所 (所長面談、理数科教育アドバイザー説明)



所長面談では、エチオピアの国について話をさせていただきました。日本からは、教育支援、インフラ整備、食料支援、農業支援など様々な方法で支援をしていることが分かった。日本とエチオピアは似ているところがたくさんあり、外国人との接触が少ないため、独自の価値観や文化を大切にしているところがあることや、外から学ぶ事に積極的になれない面があることを教えていただいた。その中で1番印象に残ったことは、「国際人とはどのような人か」ということである。国際人とは相手の国の価値観と日本についてのことの両方を知っていることが大切だと教えていただいた。理科教育アドバイザーからの説明では、エチオピアの教育の制度や現状を聞いた。エチオピアでは教員の意欲も低く、給料も安定したものではない。先生自身が十分な教育を受けていないことや教材が不足していることで、学校に通っていても正しい知識を学ぶことが難しい。学校に通っている子が何をどのようにして学ぶかが課題になっていることを教えていただいた。(加藤千智)

[8/8(月)]

② 青年海外協力隊 (理科教育) 活動・Temenjayazhe Primary School 訪問



学校に着くと、すぐに集まった子どもたちが大きな声を上げながら手を振って迎えてくれた。みんなとても人懐こく、自分から自己紹介をしてくれた。交流では、折り紙、あやとり、こま、学校紹介、福笑いなど日本の文化を紹介しながらできる遊びを3つの教室に分かれて行った。子どもたちはとてもエネルギーで楽しそうに遊んでいた。しかし、その教室の窓は割れ、床にはゴミが散乱しており、勉強をする環境は決して良くはない。そんな中、青年海外協力隊の方々は、少しでも良い環境で子どもたちが学べるように、授業作りや環境作りに取り組んでいた。高価な薬品に代わるものを提案したり、現地の先生と連携したりして、最終的にはグループ実験ができるようにすることを目標にしていると伺った。エチオピアが、これから中進国を目指し、工業に力を入れていく中で、理数科教育は直接国力につながる大切な要素である。子どもたちが理数科に興味をもち、楽しく学べるよう、日本のサポートがあるのは誇らしいと感じた。(木下恵)

[8/8(月)]

③ アディスアベバの青年海外協力隊とのワークショップ



青年海外協力隊の6人の方々とのワークショップでは、それぞれのエチオピアのおすすめやエチオピアに来て困ったことを知ることができた。おすすめは、コーヒーはもちろんビールがおいしくて安いことや革製品の質がよいこと。自然が多く過ごしやすい気候やダンスの足や首の動きがすごいことなどを教えていただいた。困ったことは、ダニが多いことやスリやセクハラが多いこと、言葉の面や時間にルーズであることなど

であった。また、日本の子どもたちに考えてほしい、学んでほしいことについて青年海外協力隊の方々と共に考えた。世界を見ることで、日本の常識と世界の常識が違うことを知ってほしい、日本が恵まれていることを感じてほしい、幸せや豊かさとは何かを考えてほしい、外見や宗教などに関係なくみんな同じ人間であることを知ってほしい、ハングリー精神をもってほしい、違いを楽しめる人になってほしいなどの意見が出た。ワークショップを通して、改めて教育について考えることができた。(近藤勝士)

[8/8(月)]

④ JICA エチオピア事務所関係者との懇親会



懇親会では、おいしくて安い地元のビールを飲みながら、昼間とはまた違った雰囲気の中で、JICA 職員や青年海外協力隊の方々に、普段の生活や人生について貴重なお話をたくさんしていただいた。JICA 事務所次長の田中宏幸さんが「エチオピアは日本から遠い国だけど、来てみると日本と同じように家族や年長者を大切に敬ったり、人のことを考えたり、意外と普通。エチオピア人も日本人もみんな一緒だ。」と語ってくだ

さったのが特に印象に残っている。青年海外協力隊の方々が、現地の人たちと同じ言語で話し、同じ物を食べ、共に笑ったり、悩んだり、助け合ったり、課題に立ち向かったりしている姿を目の当たりにして、おもしろそうだ、私もいつか参加したいと強く思った。また、JICA 職員の方々は、家族ぐるみでの付き合いがあり、職員の子どもが、まるでみんなの子どものように大切にされている姿を見て、温かくていいなと思った。(佐藤仁美)

[8/9(火)]

⑤ 品質・生産性向上 (カイゼン) 普及能力開発プロジェクト



Ethiopia KAIZEN Institute (EKI)にて、マッコネン副所長からお話を伺った。国が経済発展のために農業から工業へ産業をシフトしていきたいと考えたところ、アフリカ開発会議にてメレス前首相がカイゼンに興味を持ち日本政府に協力を要請、2009年から2010年にかけて行われたパイロットプロジェクトで一定の成果があったことから、カイゼンがエチオピアに受け入れ

られたとのことである。これを導入することで無駄を省き、作業効率を上げ、100億円もの成果を上げることができたようである。カイゼンでは「整理、整頓、清掃、清潔、躰」(5S)を導入しているが、専門家の田淵さんによると、整理と整頓をするだけで30%~50%ほどの効率が上がるとのこと。エチオピアでは学校のカリキュラムに取り入れることで人々にマインドセットを植え付けるようにしているようだが、実務経験が乏しいためになかなか取り入れることができないのが課題とのことである。これを解決するために、専門家がKAIZEN Promotion Teamを発足し指導しているとのこと。(鈴木翔大)

[8/9 (火)]

⑥チャンピオン商品 (エチオピアン・ハイランド・レザー) 取扱店舗

エチオピアン・ハイランド・レザーは、とても薄く、軽く、柔らかい。3,000メートルにもおよぶ高地にも関わらず温暖で快適な気候に恵まれたエチオピアで育つ羊は、厳しい寒さから身を守る必要がないので、皮膚がとても薄いのが特徴。最大0.35mmまで薄く高密度で丈夫なシープレザーを作ることができる。驚くほど気持ちの良い触り心地。一般的な羊より毛穴の数が多く、その数は1平方センチあたり1,860個におよぶ。毛穴の数が多き皮の表面は、非常にきめが細やか、まるで赤ちゃんの肌のように柔らかくなめらか。しかしながら、店頭で陳列される商品には、わずかながら細かい傷があり、商品価値が下がるために、国際競争の中で勝ち残るには課題も多い。品質の良いものから輸出され、残った物が国内で消費される傾向にあるのだと聞いたが、今後課題がクリアされ、日本の店頭にたくさん陳列される日が来るのを楽しみにしたい。(松田真紀)



[8/9 (火)]

⑦2000 Habesha Cultural Restaurant (エチオピアの料理と伝統ダンス)

伝統ダンスには圧巻だった。表情豊かでたくさんほほ笑みかけてくれた演奏隊の男性たち。その弦楽器とドラムでの生演奏をバックに、いろいろな衣装を身にまとった男女が陽気に、時にセクシーに、激しく踊っていた。特に女性の肩や頭を回すダンスは、激しさと品の良さを兼ね備えており、素敵だなと思った。音楽は曲によっては日本の演歌を思わせるようなゆったりした曲もあった。また、前評判があまりよくなかったエチオピア伝統料理のインジェラだが、ほのかな酸味と独特の食感が私の口には合い、美味しくいただいた。インジェラと共に食べるワットも種類が豊富で、いろいろな味を楽しむことが出来た。やはり何事も経験してみなければ、真実は分からないと思った。(油科里佳)



[8/10 (水)]

⑧ジレン No.2 小学校訪問

ジレン No.2 小学校では、午前中はオロミア語 (この地域で話されている言葉) での授業、午後からはアムハラ語 (エチオピアの公用語) での授業が行われる。どちらの言語で授業を受けるかは、その民族

により異なり、家族で相談して決める。民族によって言葉が異なり、教育を受ける言語が異なることに驚いた。校舎を見学すると、窓は割れており、壁にはたくさんの落書き、天井は穴が空いていた。現場の先生方は教材が不足していると言ってみえた。日本の教育現場との違いを感じる光景であったが、ここで学習する子どもたちの様子を想像した。一方、ジレン No.2 小学校では、アクティブラーニングを取り入れた学習をしているということだった。日本との共通点を知りうれしくなった。15歳の男の子にインタビューすることができたが、「エチオピアを変えたい。もっと教育を受けたい。そして自分が大人になったら村に新しい学校をつくって貧しい子どもたちに教育の機会を与えたい」と真剣なまなざしで語っていたのがとても印象的であった。(吉田麻里子)



[8/11 (木)]

⑨付加価値型森林コーヒー生産・販売促進プロジェクト

どんどん開発され、発展しているエチオピアにおいて、自然を残していくことの大切さには気付きにくい。どんなに自然保護を訴えても、現地の生活の利益との結びつきが見えにくいものでは人は動かない。そこで、森林の保護をしながら、そこに自生するコーヒーを売ること、現地の農家の収入を上げるという Win-Win の関係を目指すというのがこのプロジェクトである。さらに、森林で採れたコーヒーに付加価値を付けたり、コーヒーを販売する仕組みを整えたりすることで、実際に農家の収入は大幅にアップし、人々の生活も向上したという。自然を保護しながらも現地の生活力を高めるコンセプトは、これからの支援のあり方にとって重要な考え方だと思う。開発と環境破壊がセットで行われてきたこれまでのプロセスから、開発と環境保全を同時に考える転換期を迎えていると感じた。(木下恵)



[8/12 (金)]

⑩青年海外協力隊 (環境教育/観光) 活動・⑬インジェラ体験教室・⑭ハチミツ屋

青年海外協力隊としてボンガに派遣されている村岡すずかさんと牧秋宏さんにお会いした。村岡さんは、学校などを回り環境に対する教育をされており、牧さんは現地の県庁で観光のパンフレットを作るなど精力的に活動してみえた。エチオピアの地方で、現地の人々のために一生懸命働いている姿がとてもまぶしかった。現地の少女の教育推進のために NGO を運営しているアシャナイさんにもお会いし、女性教育の課題の解決に向けての話を聞き、感銘を受けた。また、バルタ小学校の近くにあるお家にお邪魔させていただき、インジェラをつくる体験をさせていただいた。一般の家庭でどのように主食であるインジェラがつくら



れているのか（テフ粉から発酵させてインジェラになるまで）をガネットさんというお母さんに詳しく教えていただいた。あのインジェラが蒸し上がる香りは忘れないうら。チラ村では、養蜂が盛んで、道路沿いにあったハチミツ屋さんに寄って2種類のハチミツを試食させていただいた。花の香りのする味わい深いハチミツで、お土産に1kg購入した。（吉田麻里子）

[8/12 (金)]

⑪ギンボ高校訪問・⑫バルタ小学校訪問



ギンボ高校訪問では、エチオピアの教育の課題を知ることができた。施設面がよくないこと、図書室の蔵書が充実していないこと、教材が足りていないので先生自身がちゃんとした教育を受けていないことなどがエチオピアの学校の共通の課題として挙げられる。また、地方の学校では、20~30キロ歩かないと学校に通えず、遠すぎて通えなくなる子がいることや、女の子は登校途中で性暴力被害に遭うことがあったり、家庭が学校へ子どもを送り出すという考え方が薄かったりすることなどが課題である。意外だったのは、心理カウンセラーが配属されており、うつ病の相談や恋愛の相談があるという話を伺い、日本と同じであることを感じた。バルタ小学校訪問では、素晴らしい歌とダンスの歓迎を受け、花束までもらい感激した。

その後、ソーラン節を披露し、折り紙や大縄跳びやビーチバレーなどで交流を行った。子どもたちの純粋に楽しむ笑顔に思わずこちらも笑顔になった。子どもたちの笑顔の素晴らしさは世界共通だと改めて感じた瞬間であった。（近藤勝士）

[8/13 (土)]

⑮ディスアベバ市内見学

(8/10 川見学、8/13 ホーリー・トリニティー大聖堂、8/15 国立博物館など)



アディスアベバ市内見学では8月10日にカンベンナル川へ、8月13日にホーリー・トリニティー大聖堂、8月15日に国立博物館を訪れた。カンベンナル川では村を通りながら河原までおりたが、途中の道には動物のフンがあり、河原にはゴミが多く置いてあった。ホーリー・トリニティー大聖堂はヨーロッパにある大聖堂と同じように静かで厳かな雰囲気があった。壁にはステンドグラスでキリストの絵が描いてあり、神聖さが表れていた。礼拝に訪れる人も多く、周囲には讃美歌が流れていた。また、大聖堂の周りには露店のような形で讃美歌の収録されたCDや礼拝に使われる線香、十字架の首飾り、聖書、エチオピア正教を題材にした子ども向きの本があった。国立博物館には、アウストラロピテクスのルーシーが展示されている。今回はルーシーのある地下1階のみ見学した。展示してあったのはルーシーの化石であった。完全なる形として置いてあるわけではないが、人体という形の面影があるほど展示されていた。（鈴木翔大）

[8/14 (日)]

⑩飲料水用ロープポンプの普及による地方給水衛生・生活改善プロジェクト

穴からバケツを放り込んで水をくむ伝統的スタイルからの転換をはかるため、飲料水用ロープポンプの普及に力をいれている。従来型のくみ取りでは、人が落ちる、子どもが命を落とす、家畜の糞が入り込むなど、安全な水が供給できない。エチオピア全国民のうち、2人に1人は安全な水が飲めないという。1人あたり20リットルの綺麗で保護された水を供給するのが望ましい。私たちは、1日1人あたり300リットルの水を使用し、その50%はお風呂とトイレに使われていると知った。飲める水を、ぜいたくに使ってきたこれまでの生活を振り返り、基本的社会サービスが受けられない人々の支援の在り方について考える機会となった。ロープポンプの水は綺麗だったが、バケツで穴から汲んだ水には、ほこりやゴミが浮いていて濁っていた。ロープポンプは身近な材料を使い、自ら作りメンテナンスまでできるという自立型の支援となっているため、今後も普及の拡大が期待される。(松田真紀)



[8/14 (日)]

⑪南部諸民族州リフトバレー地域給水計画

ブタジラの大衆用水汲み施設(水洗台)には、水を汲むための容器のカラフルなジェリカンを持った子どもたちがたくさん集まっていた。家庭の水を確保するのは主に女性・子どもの仕事だ。水の入ったジェリカンはとても重く、大人の私でも1つ持ち上げることが困難だった。子どもたちの中には、それを2つもつ子もいた。JICAの支援により巨大なタンクが設置され、各水洗台に水を供給する仕組みができた。それにより、人々は安全な水にアクセスできるようになっただけでなく、管理のための新たな雇用を生み出したり、メンテナンスを含め長期的に安全な水を受け取り続けるシステムも構築された。彼らが、自身の手で安全な水にアクセスし続けることができる支援こそ、生活向上の基盤になると感じた。(油科里佳)



[8/15 (月)]

⑫青年海外協力隊(服飾)活動/生産性向上センター

青年海外協力隊の佐藤恵利さんの職場である、服飾の職業訓練校を見学させていただいた。ここでは、区役所での書類があれば2週間の訓練を無料で受けることができるそうだ。近くに縫製の工場がたくさんあり、ここで技術を身に付けたあとすぐに働くことができるため、人気のようだ。14歳の研修生もいるということを知り、エチオピアの現状を知った。佐藤さんのカウンターパートの先生は、「恵利はとてもよく生徒を見てくれるし、賢く言葉もよくわかる。そして本当に一生懸命働いている」と話してくださった。その言葉



から佐藤さんをととても信頼していることを感じたし、これまでどれだけ佐藤さんが職場に溶け込み、エチオピアの人々に積極的に関わってきたかがわかった気がした。それは、訓練校で生徒に親身になって丁寧に教える姿や、先生との会話の中でも十分伝わってきた。エチオピアの地において、現地の人のために熱心に働く日本人の活躍を知ることができうれしかった。(吉田麻里子)

[8/15 (月)]

⑱青年海外協力隊 (陸上競技) 活動



Abebe Bikila Stadium でエチオピアのナショナル陸上チームが練習しているところを見学させていただいた。陸上の大会でメダルをとる選手は、みんなこの Abebe bikira stadium で練習している。エチオピアはマラソン大国であるが、その強さの秘訣は、首都アディスアベバが標高 2,500 メートルという立地、鉄分が小麦の 3 倍、カルシウムが小麦の 25 倍もあるテフ粉を使ったインジェラを毎食食べていること、アベベなどの成功例があることでエチオピアンドリームとして目標にしやすいこと等がある。青年海外協力隊の活動としては、選手への陸上指導だけでなく、栄養指導や小学校での陸上指導も行っている。陸上の練習で大切にしていることは、楽しいと思える練習から始められるようにするために、選手とのコミュニケーションを積極的にとること。また、手の振り方や足の接地、走る時の姿勢を中心に速く走るためのポイントも教えてもらった。(加藤千智)

[8/15 (月)]

⑳アディスアベバ市内教材収集



デモが活発に行われていたせいか、スーパーに入るだけでも持ち物チェックや身体検査などのセキュリティチェックがあったことに驚いた。スーパーには食料品から日用品まで様々なものが置いてあったが、中でもインジェラ用の家電が目をつけた。また、マーケットには、野菜、果物、衣類、床屋など様々な種類の店が連なっていた。床屋では、客は外で頭を洗い、店員が客の頭に洗面器に入れた水を掛けるというスタイルで、共同作業という感じが新鮮であった。エチオピアならではの物もたくさんあった。コーヒーセレモニーで使う様々な道具、エチオピア正教に関する道具、民族楽器など珍しい物に目が奪われた。特にコーヒーセレモニーセットは、日本でコーヒーを飲むときに使う道具とはまったく違い、カップの大きさもかわいらしいものであった。コーヒーが苦手な私でも最後まで飲みきることができ、コーヒーを楽しむ余裕さえ出てくるようになった。(木下恵)

[8/16 (火)]

㉑JICA エチオピア事務所報告会

研修を通して、エチオピアで学んだこと、日本に帰ってからどうしたいかについて、参加者全員がそ

それぞれの思いを熱く語った。後半は「幸せとは何か?」「なぜ日本は幸福度が低いデータがあるのか?」について話し合った。周囲の目を気にしてしまう、今を生きるのではなく未来の貯蓄のために生きている、いつも何かを追われている、そもそも幸せの定義は人それぞれだ、考えれば考えるほど分からなくなる、といろんな意見が出た。JICA 事務所所長の神公明さんの定義は、自分の居場所があることと自分のものさしがあること。この 2 つがあれば、困ったときも自分がちゃんと生きていると感じられるのではないかと、その言葉を聞き、そういう考え方もあるのだなと心に響いた。ワークショップやバスの移動中など、様々な場面で多くのことを話し合い、共有してきた。この報告会を通して、素の自分を出し、お互いを尊重し合える、こんなメンバーと共に学び合えたことを、私は幸せに感じた。(佐藤仁美)



[全般]

● エチオピアでの飲食全般 (各地でのコーヒーセレモニーを含む)

エチオピアでの主食はインジェラという名前のクレープのようなものだった。テフ粉を原料にして作られており、発酵させてあるので独特の酸味があるのが特徴だった。アディスアベバで食べたインジェラは酸味も少なく食べやすいものもあったが、地方の方に行くとも酸味が強くなっていった。ギンボでのインジェラ体験教室では、現地の家庭で実際にインジェラを作るところを見せてもらい、実際に自分たちで焼くことも体験させていただいた。インジェラは、クレープを焼くイメージでいたが、バケツいっぱい生地を作り、焼くのではなく蒸し上げて作っていた。想像していたことと違うところがたくさんあり、やっぱり実際に体験することはすごく大切なことだと改めて感じた。エチオピアでは、コーヒーが大変有名で、滞在中に何度もコーヒーを飲む機会があった。中でもコーヒーセレモニーは、とても印象に残っている。丁寧に時間をかけてコーヒーを入れてくださることで、相手への歓迎やおもてなしの気持ちが伝わってきた。エチオピアではコーヒーにミルクを入れることはあまりなく、ブラックかたっぷりの砂糖を入れて飲むことが多かった。(加藤千智)

